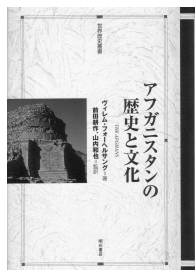


## 新刊紹介

### ヴィレム・フォーヘル サンダグ著、前田 耕作・山内和也監 訳『アフガニスタン の歴史と文化』明 石書店、二〇〇五 年

鈴木 均



二〇〇一年以来、アフガニスタンに関して日本で刊行された翻訳書の数は決して少なくないが、本書はアフガニスタンの歴史的・文化的側面の叙述に大きく紙面を割いた通史として興味深く、また注目すべき内容を含んでいる。

例えば「パシュトゥーン人」と「アフガン人」はどのような意味の重なりと差異を持つのかといった微妙な問題について、本書は歴史的に遡ってある程度納得のいく説明を与えてくれる。著者によれば「すべての現在のパシュトゥーン人が同じ民族的起源を共有しているという証拠はまったくない」し、アフガンという名称にしても「インド・イランの境界地域に住むいくつかの民族を示すために、外側の世界の人々がこの名称を使用した、ということが十分に考えられる」としている。

『アケメネス朝の勃興と組織』(ライデン、一九九二年)を主著とする著者にとって、アフガニスタンは中央アジアからイラン、インドを結び伸縮自在な地域として極めて柔軟に捉えられているに違いない。著者によれば「どのような場合であっても、インド・イラン人の移住者たちは(イラン)高原に侵入する前に、まず最初に現在の北アフガニスタンを含む山脈の北側に住んでいた人々と接触したのである」。

また一方イランとの文化的交流を考察する際に、イラン南東部のスイスターンがかつていかに重要な位置にあったかについても、本書のような文化史的な観点によって初めて明らかになる。その中心を担っていた「ヘルマンド文明」は紀元前三〇〇〇年紀後半に北アフガニスタンの急激な発展に伴って衰退するが、初期イスラーム時代の八六一年、サッ

ファール朝の勃興によって再び政治的・文化的発展の時代を迎える。

紀元前四世紀のアレクサンドロスⅠの侵攻にアマダリヤ川の北方では殆ど抵抗が無かったのに対して南側では激烈な戦いを強いられた。この理由を著者は「現在のアフガニスタン北部の平原では、農業生産による富を基盤にした支配者たちが人々を治めていた」のに対し、アマダリヤ川北岸の人々は「農業にはほとんど依存していなかった」と簡潔に説明する。

その後イスラーム時代に入ってから現在のアフガニスタンに匹敵する領土を支配したガズナ朝はイラン文化の復興の舞台となったが、この間の事情に対する説明も簡潔ながら巧みである。著者によれば「イラン復興はイラン高原のイラン人に対する中央アジア南部のトルコ系勢力が増大しつつあった時期に起こったともいえる」。「トルコ族の：偉大なガズナ朝のマフムードは、中世ペルシア文学の最高傑作であるフィルドウーシイが著した『シャーナーメ』の庇護者となった」。

これらの興味ある指摘に比べて一九三〇年代以降の現代史の部分はあくまでも簡明に要点を押えた記述であるが、この部分に関しては既に類書も多いのでそちらを見れば良いということだろう。アフガニスタンの近代以前の文化史に関して、本書は読み手の興味に応じ様々な考察の材料を提供してくれる。本書の特徴は

あくまでも文化史や民族誌の包括的な叙述・紹介にあり、それを古代からの通史の軸で纏めた最新の「アフガニスタン文化百科」として利用することも可能である。

その意味では詳細に作られた索引は大いに利用価値があり(とはいえば「アフガニスタン」の項で参照を求めている頁数の多さには読者は辟易するであろうが、「注」と連動する「参考文献」も決しておさなりではないので役に立つだろう。

「訳者あとがき」によると著者のフォーヘルサンは元々古代インド・イランの考古学が専門であるが、現代的な問題にも強い関心があるようである。アフガニスタン問題に積極的に関わりうとする訳者のお二人の姿勢とも相通じるところがあったのではない。本書の意義は「これまではない豊富な史料と新しい知見とを縦横に駆使して、イラン高原の一角、ヒンドウークシュ山脈の南北に生を営んだ人々の多様な文化の諸相を初めて包括的に明らかにし」たことにあるという。

最後に出版社の明石書店は近年アフガニスタンに関する書籍を意欲的に出版している。手前味噌になるが、ほぼ同時期に刊行された拙編著「ハンドブック現代アフガニスタン」(明石書店)は同書とよい補完関係にあると思われる。ぜひ併せてご覧になっていただきたい。

(すずき ひとし/アジア経済研究所新領域研究センター)